

脂質異常症は動脈硬化の要因であり、心血管疾患(CVD)発症の危険因子である。また、慢性腎臓病 (CKD) はCVD発症の高リスク群であり、脂質異常症はCKD発症のリスク因子でもある。このように、CKD患者においてCVDリスクを抑えるために脂質異常症への対応は重要である。現時点では、CKD患者の脂質異常症の対応としてはLDLコレステロールを低下させることが治療の第一目標となっている。しかし、糖尿病のあるCKD患者においてはスタチンによりLDLコレステロールを低下させることによりCVDのリスクを抑えられるが、治療後もベースラインの70%程度のリスクが残る。そのため、このようなresidual riskの要因として、TG、HDL、small dense LDL、レムナントなどが注目されている。脂質異常症の治療目標としてLDLに次いで危険因子となっている指標を探索することを目的として、国内循環器疫学研究、慢性腎臓病(CKD)の臨床試験のデータを用いて課題研究を行うため、脂質異常症を評価する項目について検討し、指標を提案したい。

参考文献

Valentina Kon,Haichun Yang,et al.Residual Cardio Risk in Chronic Kidney Disease:Role of High-density Lipoprotein.Archives of Medical Rsearch 46(2015)379-391.